プロテスタントたちの19世紀イタリア：近年の研究動向と課題から

白川　太郎

序論：近代イタリア研究とプロテスタント

近代イタリア半島の歴史を叙述するにあたって、プロテスタントと総称される改革派・福音派の果たした役割は、これまで軽視される傾向にあった。イタリアが古くからローマ・カトリック教会の本拠地であり、人口のほとんど全てが同教会に属していることを思えば、それは不思議ではない[(1)]。とはいえ、19世紀末まで数万人に過ぎなかったプロテスタントの活動は、イタリア半島や近隣島嶼の近代史にとって見過ごすことのできない重要性を持っていた。その検証は、ヨーロッパと地中海世界全体の歴史を多元的に理解するために必要不可欠のものである。

本稿の目的は、近代イタリア半島のプロテスタントに関する研究動向を整理し、現在の課題および展望を確認することにある。対象時期は1790年代の革命運動から第一次世界大戦へ至る「長い19世紀」である[(2)]。地理的にはイタリア半島と周辺諸島嶼を主としつつ、現在のイタリア共和国領には含まれない地域の動向や亡命者・移民の活動をも合わせて検討する。

ここでプロテスタントと総称するのは、伝統的なルター派・カルヴァン派・イングランド国教会・再洗礼派系の諸教会に加え、アルプス渓谷地帯のヴァルド派、18世紀初頭より各宗派の内部に出現した福音主義運動（現在は、ここまでが「歴史的プロテスタントProtestanti storici」と総称される）と、彼らに影響を受けた自由教会派である。これら諸宗派は、教理・典礼・教会組織・実践等の点で大きく異なっており、互いの間で少なからぬ対立を経験した。単一の「イタリア・プロテスタント」史は存在し得ないし、研究史上にも想定されてこなかった。しかし、彼らがしばしば同じ「プロテスタント」として合同や協力を試みたこと、共通してカトリックに対抗する姿勢を示したこと、そして外部の人々も彼らを「プロテスタント」として包括的に捉えていたこと、これらもまた紛れもない事実である。そのため、ここでは内部の差異や境界線の流動性を踏まえた上で、「プロテスタント」諸宗派の全体を視野に入れた研究史の整理を試みる。

1．「宗教改革」の不在：イタリアとプロテスタント

19世紀のヨーロッパにおいて、イタリア半島の相対的な「後進性」、すなわち近代的な統一国家形成の遅れや経済の停滞は、一般的な事実として語られていた[(3)]。15世紀までヨーロッパの最先端地域だったイタリア半島の諸国は、1494年のフランス軍侵入から半世紀近く継続したイタリア戦争によって大きな被害を蒙った。16世紀半ばから19世紀後半に至るまで、半島の大半はスペイン・オーストリアのハプスブルク家やブルボン家の政治的な支配下にあった。イングランドやオランダ、フランスが覇権国となるのに対し、イタリアは経済的にも文化的にもかつての輝きを失ったと思われていた。

この分岐の要因を歴史的に理解しようとする知識人たちは、宗教改革の有無に大きな意味を見出していくようになる[(4)]。彼らの説明によれば、16世紀初頭の改革を契機としてカトリック教会から離脱したアルプス以北のプロテスタント諸国では、思考・学問の近代化や強力な国家形成が進んだ。それに対してカトリックのヘゲモニーが維持された南ヨーロッパでは、「合理的・科学的思考」が迷信によって抑圧され、人々の生活も道徳的に退廃しているという。このステレオタイプ的な図式の影響力は、自己の優越を確信するプロテスタント圏の知識人のみならず、18-19世紀イタリア半島で活動した政治家・思想家さらにはローマ教会内部の一部聖職者（例えばアントーニオ・ロズミーニ）に対しても及んだ[(5)]。彼らにとっては、プロテスタントを模範とする信仰と精神の改革こそがイタリアの近代化にとって必須の条件であり、「リソルジメント」の真の終着点だった。

この「宗教改革の不在／失敗 mancata riforma」テーゼは、「長い19世紀」のイタリア半島で展開された歴史研究に大きな影響を与えた[(6)]。一方では、フェリーチェ・トッコとエミーリオ・コンバからジョアッキーノ・ヴォルペに至る中近世史家たちが「イタリア」の遠い過去のうちに改革の先駆的試みを探求し、カトリック教会が断罪した「異端」運動に新たな価値を見出した[(7)]。他方で、直近の過去である革命と統一国家形成の運動が、キリスト教的な言葉である「リソルジメント」の名において、新たな「信仰改革」として記述された[(8)]。この図式を支持する反教権的知識人たちは、近世の宗教改革と「リソルジメント」を精神的に結びつけ、後者の本質は半島の政治的統一ではなく「イタリア人」の精神的再生にあると主張した。ジュゼッペ・デ・レーヴァ（Giusppe De Leva, 1821-95）、パスクアーレ・ヴィッラーリ（Pasquale Villari, 1827-1917）、フランチェスコ・デ・サンクティス（Francesco De Sanctis, 1817-83）からベネデット・クローチェ（Benedetto Croce, 1866-1952）、ピエロ・ゴベッティ（Piero Gobetti, 1901-26）、アントーニオ・グラムシ（Antonio Gramsci, 1891-1937）に至る19世紀末から20世紀

初頭の知識人たちは、確かに各自が設定した「リソルジメント」の終着点やカトリックの代替として構想された「イタリア」の精神的基盤や現状の達成度に対する評価こそ大きく異なっていたものの、いずれも「宗教改革の不在／失敗」という問題意識を有し、「イタリア人」の信仰改革と精神的再生という共通の綱領を掲げ、その指針を歴史のうちに求めたのである[9]。

ただし、こうした巨視的な歴史把握が自由主義期の知識人の多くを拘束していたのは間違いないとしても、実際の歴史研究の場は必ずしもその視角と結びついてはいなかった。19世紀末に始まる近代イタリア・プロテスタント研究の多くは、各宗派・教会ごとに自らの来歴を語るというかたちで行われ、その内容は教会の制度史（特に国家との関係史）や事件史が主だった。そのため、「プロテスタント」という宗派横断的な主体が想定されることは少なかった。しかし、「宗教改革の不在／失敗」というトポスやその派生物である中近世の改革とリソルジメントを同一視する枠組は、その後も多くの研究者にとって参照軸ないし批判対象となり、無形の影響力を保持し続けるのである。

2．ジョルジョ・スピーニの「三部作」：自由主義とプロテスタント

第二次世界大戦後に、近代イタリアの「プロテスタント」という包括的な研究領域の形成に大きな役割を果たしたのは、歴史家ジョルジョ・スピーニ（Giorgio Spini, 1916-2006）である[10]。彼は福音派の父とカトリックの母のもとフィレンツェに生まれ、幼少期は同地のヴァルド派教会に通った。成人後にはメソジスト教会の定住伝道者となり、1975年に行われたヴァルド派教会・メソジスト教会のイタリアにおける合同では大きな役割を果たした。政治的には自由主義の熱烈な信奉者であり、1941年に招集されてイタリア軍兵士となるものの、翌42年には行動党に入党、43年には負傷してヴァルド派の谷にある軍事病院へ入院したのを機に脱走し、レジスタンスに身を投じた。第二次大戦後は、同じく自由主義系のフェデリーコ・シャボーのもとで学んでいる。息子ヴァルド・スピーニは左派の政治家で、2021年にはヴァルド派聖職者総会議長に選出された[11]。

ジョルジョ・スピーニは近世フィレンツェと近代プロテスタントという２つの専門を持ち、いずれについても1950年代から2000年代まで幅広い業績をあげている[12]。後者の主著『リソルジメントとプロテスタント』（1956年）は、発表から30年以上にわたって改訂が繰り返され、今日まで研究の基本的枠組をかたちづくってきた[13]。2000年代には続編『自由主義期のイタリアとプロテスタント』（2002年）と遺著『ムッソリーニのイタリアとプロテスタント』（2006年）が発

表され、彼の近代史像の全体が示された[14]。以下ではその内容を紹介しながら、研究の特徴を整理する。

スピーニが描く近代イタリア史は、クローチェやシャボーが確立した自由主義的な「リソルジメント」観を前提とし、その過程でプロテスタントが果たした役割を重視するものである[15]。彼は、「リソルジメント」を、「イタリア」という枠組において個人と社会の「自由」が実現する精神的・倫理的運動、「19世紀の道徳的良心の中でも最も記憶すべき、神聖な出来事のひとつ」と捉えている。この運動は、「人間に関するそれまでの観念と、ナポレオン体制が依拠していた政治的契機と倫理的＝宗教的契機の関係が、それぞれ不十分に感じられるようになった時点ではじまる」[16]。したがって、政治的統一の結果として誕生した自由主義体制に対する評価は（理想化とはかけ離れているにせよ）高く、ファシズム政権は「逸脱」として拒絶される[17]。

スピーニは、「リソルジメント」が中近世の改革の再現ないし延長であるとする伝統的な発想を断固として否定する。彼によれば、16世紀の改革者と17世紀のエピゴーネンたちは、対抗宗教改革によって攻撃され、その記憶のほとんどが失われている[18]。アルプスのヴァルド派は近世と近代のプロテスタントを架橋する唯一の存在だが、18世紀には「霊的な空虚」に陥っており、リソルジメントには積極的な貢献をしていない[19]。18世紀初頭のピエモンテで行われた啓蒙主義的改革や同世紀後半のイタリア・ジャンセニスムも、「リソルジメント」の主体となった自由主義者や民主派とは精神的に異質であるとされる[20]。

このように過去の改革運動からの継続性を否定するスピーニの「リソルジメント」は、畢竟外国からの影響を強く受けた運動として記述されることになる。半島外部のプロテスタント諸国からの思想的影響と、「イタリア人」による自由主義の領有こそが、スピーニにとっての「リソルジメント」の推進力であり、近代イタリア史そのものでもある。

このイタリア史においては、スイスの諸都市が最も大きな役割を果たす。19世紀初頭には、コペのスタール夫人のもとに集まったサークルが、政論・評論・史書を通じて自由主義の精神をイタリアにもたらした。「宗教改革の世界は、コペの自由主義を通じて、来たるべきリソルジメントの意味あるマニフェストを与えた」[21]。特に注目すべきは、もちろんシスモンディの『中世イタリア諸共和国の歴史』全16巻である[22]。次いで都市共和国ジュネーヴには、かつてイタリアから亡命した改革者の末裔が暮らしており、彼らが「リソルジメントの神話」の生産者となった。また、理神論の影響を受けた同市の知識人たちは宗教を倫理の問題へ還元する傾向にあり、その道徳論はプロテスタント的な思考がカトリック世界に受容される際の回路となった[23]。

啓蒙期の理神論的キリスト教とは対比的な性格を持つ信仰覚醒運動も、イタリアに対して多大な影響を及ぼした。18世紀から19世紀前半のプロテスタント圏では、個人的な回心体験と宣教を重んじる福音主義運動が宗派横断的に活発化する[24]。中でも、トスカーナとピエモンテを通じてイタリア半島に流入したのが、ジュネーヴで展開された「覚醒」運動とその外縁に位置する神学者アレクサンドル・ヴィネ（Alexandre Vinet, 1797-1847）の思想である。近世的な国教体制や形式的な信仰実践から個人的かつ内面的な信仰への移行を主張するヴィネの自由主義は、カミッロ・カヴール（Camillo Cavour, 1810-61）やラッファエッロ・ランブルスキーニ（Raffaello Lambruschini, 1788-1873）とも共鳴し、一時的とはいえエキュメニカルな宗派間融和の雰囲気が生じる[25]。しかし、1840年代後半にピエロ・グイッチャルディーニ（Piero Guicciardini, 1808-88）やティート・キエージ（Tito Chiesi, 1805-66）ら非妥協的なプロテスタント指導者が台頭すると、トスカーナでは融和派の影響力が減衰し、宗派間の対決姿勢が強まっていく。

スイスと並んで「リソルジメント」に推進力を与えたのは、イングランドとスコットランドである。とはいえ、イングランド国教会はイタリア半島では人気がなく、ブリテン国家が果たした役割は各地の居留地を通じた文化的影響とヴァルド派に対する援助に限定された[26]。ブリテン島とイタリア半島の結びつきを担ったのは非国教会系のプロテスタント、すなわちナポレオン没落後にイタリア半島へ進出した聖書配布協力会やスコットランドの自由教会派、そしてメソジスト等の福音主義系諸教会だった。彼らは、自由主義・道徳主義そして慈善と民衆教育を重視する精神をもたらし、ジュネーヴの「覚醒」と並んでイタリアの活動家たちに影響を与えた。

また、スイスとブリテンは革命家の亡命地としても重要であった[27]。当時のイタリア半島がコルフ島やマルタ島などのブリテン領に囲まれていたことには留意が必要である。亡命者たちの中には、グイッチャルディーニなど信教を理由に亡命した人物もいれば、1848-49年の経験からローマ教会に失望し、亡命後にプロテスタントへ改宗した人物もいる。ローマ共和国でガリバルディ軍の従軍司祭だったアレッサンドロ・ガヴァッツィ（Alessandro Gavazzi, 1809-89）が後者の代表例だろう。いずれにせよ、ロンドンにはプロテスタント各派を奉じる亡命者のサークルが形成された。主なものとして、雑誌『サヴォナローラのこだま』を拠点とするサルヴァトーレ・フェッレッティ（Salvatore Ferretti, 1817-74）とカミッロ・マペイ（Camillo Mapei, 1809-53）のグループ（サヴォナローラ派）や、プリマス・ブレザレンのジョン・ダービイと結びついたグイッチャルディーニやテオドリコ・ピエトロコラ・ロッセッティ（Teodorico Pietrocòla Rossetti, 1825-83）（ラファエル前派の画家ダンテ・ゲイブリエル・ロッセッティの再従兄弟）のグルー

プがある。また、ジュネーヴにはベッティーノ・リカーソリ（Bettino Ricasoli, 1809-80）（後のイタリア王国第２代首相）が亡命し、自ら改宗することはなかったものの、「覚醒」運動の思想を摂取した。彼らはイタリア王国成立後になって半島へ帰還し、1860-70年代には半島宣教活動の中心を担うことになる。

これらの個人主義的・行動主義的なプロテスタント知識人と比較して、共同体的・保守的なヴァルド派にスピーニが下す評価は辛い。彼によれば、1848年以前のヴァルド派は国際世論の支持以外に行使できる手札を持たず、国家に対して受動的な姿勢に終始した[28]。解放令以後にも、政府に対して妥協的な態度を崩すことはなかった。スピーニは、彼らの保守的な信仰が近代的抵抗権の論理と相容れなかったのではないか、との推測を示している[29]。

ただし、1840-50年代になるとヴァルド派の中で世代交代が始まり、ジュネーブ「覚醒」運動の神学を内面化した1820-30年代生まれの聖職者たちが台頭して、伝統的な指導層と対立する[30]。解放令が発布されたのち、トリノ・ジェノヴァ・アレッサンドリアに新たな共同体が成立するのは、この若い聖職者層の主導のもとでのことである。宣教活動を当初から牽引した牧師パオロ・ジェイモナト（Paolo Geymonat, 1827-1907）は、マッツィーニの理想に共鳴し、1849年にはローマ共和国への布教も試みている。

自由主義期にフィレンツェに移転した神学院は、この新世代のヴァルド派知識人の活動拠点となった[31]。19世紀後半、特に1870年以後には、ジュネーヴの「覚醒」を霊的・思想的土壌として共有する教授４人が揃い、いずれも長期に渡って教壇に立った。ジェイモナト、聖書釈義学者アルベルト・レヴェル（Alberto Revel, 1837-88）とエンリーコ・ボージョ（Enrico Bosio, 1850-1935）、歴史家エミーリオ・コンバ（Emilio Comba, 1839-1904）である。レヴェルとボージョは生まれつつある高等批評を、コンバは近代歴史学の手法をそれぞれイタリア半島やヴァルド派内部に持ち込んだ。スピーニは特にコンバを高く評価し、彼が「覚醒」を経て完全な自由主義者となったとみなしている[32]。ただし、彼らはやはり例外であって、ヴァルド派全体の変化は第一次大戦前後にならなければ生じない。

スピーニの研究の特筆すべき長所は、その叙述が単なる一国史に陥らない点にある。確かに、彼にとって「イタリア」という国民国家の枠組が自明のものであり、その統一達成が目的論的に描かれる点は否めない。しかし、スピーニはイタリア半島に対する「外国人」の影響、半島での「外国人」たちの生活、そして外部宣教者の活動にも鋭い視線を向けている。そのため、確かに「イタリア」という方法論的単位が所与のものであるとはいえ、その内容は単一の「国民」には限られておらず、境界の流動性や多孔性、主体の多元性が常に留意されている。

もちろん、現在の研究水準によってスピーニの研究の問題点を指摘するのは容易である。彼の叙述は精神史に偏りすぎており、社会経済史・文化史は上部構造として概説的に触れられるに過ぎない。教会制度史や神学史すらも手薄である。また、プロテスタントの思想的・社会的影響力を強調するにもかかわらず、その叙述は彼らの世界に完結しがちであり、周囲のカトリック信徒との関係は今ひとつ見えてこない。そのため、他のアクターに着目してなされた研究との対話が困難となり、同時代の社会におけるプロテスタントの位置が伝わりきらないうらみがある。参照枠であるクローチェ的リソルジメント像の更新がなされないまま、21世紀の著作にも精神史・倫理史的手法が貫かれていることにも首を傾げざるをえない[33]。しかし、各宗派が個別に提示していた時系列を「19世紀イタリアのプロテスタント史」として総合し、明確な歴史像をともに提示した功績は、研究史上において極めて大きい。

加えて、スピーニは宗派ごとの個別研究の基盤整備にも努めている。ヴァルド派以外のプロテスタント諸宗派は、彼らに比べて組織的・制度的に弱体であり、歴史研究の基盤が存在しなかった。スピーニは、ヴァルド派のクラウディアーナ出版と協力して叢書『イタリアの福音主義運動』を創刊し、自ら第１巻『福音書とフリジア帽』（1974年）を執筆した。これは19世紀後半に試みられた福音諸派の合同計画を主題とし、自由教会派とヴァルド派の教会論が相容れないために失敗に終わる過程を描いている[34]。この叢書からは現在まで全９巻が出版されており、「兄弟たちのキリスト教会」を取り上げたドメニコ・マゼッリの２冊をはじめ、今日でも基本書として参照すべきものが多い[35]。

ピエロ・グイッチャルディーニ研究も、スピーニに多くを負っている。トスカーナ福音派の指導者だったグイッチャルディーニは、近世イタリアの改革運動に関する史料や写本・刊本の収集家であり、その旧蔵書は現在フィレンツェ国立中央図書館に収蔵されている[36]。蔵書整理・目録化の作業は20世紀後半を通じて続き、その過程で生まれたのが、当時フィレンツェ大学教授だったスピーニを中心とする「グイッチャルディーニ図書館友の会」（1986年創設）である。当初は緩やかな集まり以上のものではなかったが、2003年にはより制度的な「ピエロ・グイッチャルディーニ協会」に生まれ変わり、今日に至っている[37]。旧「友の会」と「協会」は1988年から年次の研究集会を開催しており、それに基づく論集はクラウディアーナやレオ・オルシュキから不定期に出版されていた[38]。2010年からはビブリオンの『グイッチャルディニアーナ』叢書から毎年論集が刊行されるようになって、現在は６巻が出版されている。

これらの業績を鑑みれば、スピーニこそが「近代イタリア・プロテスタント」という研究領域の父であると述べても大きな問題はないだろう。

3．ヴァルド派史学の伝統と展開

スピーニの活動に大きな影響を受けつつも、それとは異なる独自の歴史研究を展開したのが、ヴァルド派の歴史家であった。よく知られているように、ヴァルド派には中近世に遡る固有の歴史叙述の伝統があり、早くから独自の神学院と出版社を擁していた[39]。19世紀にイタリアへ導入された近代歴史学と文献学の研究手法も神学院を通じて19世紀末には定着した。1881年にはヴァルド派史研究協会（La Société d'Histoire Vaudoise）が設立され、会誌『ヴァルド派史紀要Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise』を通じて研究成果の公表に努めた[40]。前者は現在のヴァルド派研究協会（Società di studi Valdesi）であり、後者は『ヴァルド派研究協会紀要Bollettino della società di studi valdesi』を経て2017年からは『宗教改革と宗教運動Riforma e movimenti religiosi』と改称され、発刊が続いている。神学院紀要『プロテスタンテージモ』や２月17日叢書として知られる年刊のパンフレットも、歴史研究の成果発表の場として重要な位置づけにある。

近代のヴァルド派は、19世紀の自由主義系知識人の多くと同様に、宗教改革と「リソルジメント」運動の連続性を措定した。彼らは、自分たちの存在を根拠として「宗教改革の不在」は拒絶したものの、その「失敗」を認めるにはやぶさかではなかった。ヴァルド派――特に「イタリア化」した神学院の知識人たちにとって、「リソルジメント」はヴァルド派が連綿と保持してきた改革の精神の拡大であり、その終着点はイタリア半島全体の福音化に他ならない[41]。この枠組は、近年でもイタリア半島統一150周年の記念論集『宗教改革・覚醒・リソルジメント』（2011年）に息づいている[42]。

ただし、ヴァルド派の歴史叙述においては、1861年や1870年以上に1848年の解放令が大きな位置を占めている。彼らによる時代区分では、近世（L'età moderna）は1532年から1848年まで、近代（L'età contemporanea）は同年から現在までとされている。解放令を画期とみなす意識は研究の問題設定にも反映されており、20世紀初頭から今日に至るまで、解放令や信教の自由をめぐる政教関係史は他を圧する関心を集めてきた。

ヴァルド派研究のひとつの中心であるヴァルド派研究協会も、中世から同時代へ至る幅広い問題を取り扱ってきたが、近代に関しては1848年の解放令発布前後に傾注してきた。近年の研究集会では、1997年の『聖書・円章・三色旗：ヴァルド派と２つの解放（1798-1848年）』（論集は2001年）は、後述する「ジャコバンの３年間」200年周年と解放令発布150周年を記念して開催された[43]。1998年の『谷からイタリアへ』（論集は同年）も、1848年から150年という区切りを祝うものである[44]。こうした場が設定されている以上、ヴァルド派による19世紀史研

究の多くは、復古王政期（「覚醒」運動と政教関係）を扱うこととなる。

近代ヴァルド派研究のもう一つの拠点は、1922年にローマへ移転したヴァルド派神学院である。神学院における学術活動は19世紀から既に盛んだったものの、その多くは個性的な教授たちのイニシアティブによるもので、制度的基盤を持たなかった。例えば、雑誌『キリスト教評論*La rivista cristiana*』はコンバが主導し、ジェイモナトとレヴェルが編集に名を連ねたものの、紀要ではなかった[45]。それに対して第二次大戦後には、紀要『プロテスタンテージモ*Protestantesimo*』が創刊される。同誌はヴァルド派以外のプロテスタント知識人からの幅広い寄稿を募り、エキュメニカルな歴史像の提示を試みた。また、「ヴァルド派神学院叢書Collana della Facoltà valdese di teologia」は、近世・近代から同時代へ至るモノグラフや史料集成の公刊を行った。

神学院から発信される研究の多くは、ヴァルド派研究協会のそれとは異なり、統一後の宣教や「イタリア化」に焦点を合わせていた[46]。1940年代後半の『プロテスタンテージモ』各号では、カトリック教会と妥協したファシズム政権の悲劇を踏まえて、それまでの宣教を総括する論考が中心となる。次いで1950-70年代には、ジョルジョ・スピーニやルイジ・サンティーニが19世紀の宣教・福音化を論じる一方で、アメーデオ・モルナールやジョヴァンニ・ゴネ、ジョルジョ・トゥルン、ヴァルド・ヴィナイはイタリアの信仰改革を段階的に理解する（中世の「宗教運動」が第一次宗教改革、近世のプロテスタント改革が第二次宗教改革）歴史像を提示し、近世・近代ヴァルド派は両者を結びつける存在であるとした[47]。さらにヴィナイは第２ヴァティカン公会議以降のカトリック教会に大きな期待を寄せ、エキュメニカルな姿勢をプロテスタント以外の諸宗派にも広げて、「現代化」されたキリスト教全体の融和を望んだ[48]。

神学院の叢書に関しては、統一後の自由主義期に活動した知識人のモノグラフを多く刊行している点が特筆される。ヴィナイの『ルイジ・デ＝サンクティスとリソルジメント期のイタリア人による福音主義運動』（1965年）、トマス・ファン・デン・エンドの『パオロ・ジェイモナトと19世紀後半のイタリアにおける福音主義運動』（1969年）、チェーザレ・ミラネスキの『ウーゴ・ジャンニ：エキュメニズムの先駆者』（1979年）、ステファーニア・ビアジェッティの『エミーリオ・コンバ（1839-1904）：イタリア宗教改革と中世ヴァルド派運動の歴史家』（1989年）があり、いずれも「ヴァルド派が国民的文化に参入する」過程を描いている[49]。この他には、神学院そのものに関するヴィナイの『ヴァルド派神学院（1855-1955）』や同じく彼の『ロンドンへ亡命したリソルジメント期のイタリア福音派』（1961年）が、いずれのテーマに関して現在でも基本書となっている[50]。

ただし、研究協会と神学院はそれぞれ学派を形成しているわけではなく、両者の研究に断絶は存在しない。実際、1848年を契機としたヴァルド派の「イタリア化」（ないし、ヴァルド派による「イタリアの発見」）の枠組は、それぞれに共有されている。解放令発布までイタリア半島の他の部分と隔離されてきたヴァルド派は、48年を契機として各地への宣教に乗り出し、その過程でイタリア語を導入し、「イタリア人」意識を身につけると考えられる(51)。協会の研究がその前史を、神学院は統一以後を扱うという分業は存在していても、研究者の多くは重なり合っている。

しかし、この図式は近年になって大きく変動している。統一150周年を記念して行われた2011年のシンポジウム『イタリア・リソルジメントにおけるプロテスタンティズム』（論集は2012年刊行）は、解放150周年を記念する『谷からイタリアへ』と比べて、全く異なる研究視角を採用した(52)。後者はスピーニ以来の「覚醒」と「リソルジメント」の精神的共鳴性に着目する枠組を維持し、「谷からイタリア」への歩みを単線的かつ決定論的に記述していた。したがって、解放後のヴァルド派が「イタリア国民」意識を身につける過程は半ば自明視されていた(53)。それに対して後者は、「覚醒」運動の拡大やヴァルド派による「ナツィオーネ」概念の受容を、より動態的かつ情況的に捉えようとする論考を含んでいる。ここでは、そのうち３点を紹介したい。

まず、復古王政期に焦点を絞ったドメニコ・マゼッリの「復古王政から覚醒までのヴァルド派」とエウジェニオ・ビアジーニの「聖職者総会としてのネイション：イタリア・プロテスタントのレトリックにおける祖国と自由」が、いずれも意欲的な論考である(54)。前者は1810年代後半から1820年代にヴァルド派独自の「覚醒」が生じていたと主張し、国外からの影響を相対化する。当時の聖職者総会議長ピエール・ベールが指導したヴァルド派的「覚醒」は、谷全体の一体感を生むにあたって大きな意味を果たしたという。後者はヴァルド派が「ナツィオーネ」の観念を受け入れる際に、近世以来の「契約」概念が果たした役割の重要性を強調し、彼らが思い描いた「ナツィオーネ」が聖職者総会としての性格を有していたと考える。ビアジーニの分析は政教関係論に限定されているものの、ヴァルド派による「ナツィオーネ」概念の受容を、近世以来の知的枠組を踏まえて検討した初めての本格的論考である。

両者とやや毛色を異とするシモーネ・マゲンツァーニの論考「リソルジメント期のプロテスタント歴史学と16世紀イタリアの宗教改革」は、19世紀中盤から後半の史学史を論じる(55)。第一節で述べたように、イタリアにおける「宗教改革の不在／失敗」という問題意識を共有した多くの知識人・歴史家が、中近世に起きた改革運動の研究に向かった。マゲンツァーニによれば、この時期の研究の産

物として、次の４点を挙げることができる。第１に、生まれつつある「ナツィオーネ」の状態に対する道徳的非難、第２に「イタリア的」とされうる福音主義の定義をめぐる論争、第３にカトリックによる「迫害」の記憶の具体化、第４に、自らが普遍的なプロテスタンティズムの一部であるという感覚である。近世の改革を研究することで、ヴァルド派は「イタリア化」していく。この過程の体現者とされるのは、やはりエミーリオ・コンバである。

ここに示された新しい問題意識を要約するならば、第一にイタリア半島におけるプロテスタンティズムの内発性の再評価、第二に近世からの架橋の試み、ということになる。近世の改革運動の連続性を否定し、スイスやイングランドといった国外のインパクトに重点を置いたスピーニの歴史像との対比は明確である。この背景にあるのは、ビアジーニ論考が認めるとおり、21世紀初頭に生まれた「リソルジメント・ナショナリズム」論の展開であろう(56)。とりわけ2008年頃からの研究は、最初期の文化史研究を超えて国制・法思想・政治思想の領域における「ナツィオーネ」概念の展開に取り組んでおり、その際には近世以来受け継がれてきた知的・制度的な枠組の重要性が強調されている(57)。ヴァルド派は伝統的にプロテスタンティズムと相性の良いクローチェ的な「リソルジメント」観を保持し続けてきたが、この分析枠の更新によって、自らの歴史を「リソルジメント」史一般の内部に位置づけようと試みているのだ。

以下では、こうした「新しい」研究の動向を複数のテーマごとに分けて紹介したい。

４．スピーニを超えて――新たな研究の展開

４．１．「三年間」とプロテスタント

ボナパルト率いるフランス革命軍のイタリア半島侵入（1796年）は、イタリア史上の画期として特筆される出来事であった。革命軍の進撃とそれに呼応する蜂起によって半島の諸近世国家が崩壊し、多くはボナパルトの監督のもとで、各地に「共和国」が新たに設立された。1796年から1799年にかけての３年間は、イタリア史上において「共和国の三年間／ジャコバンの三年間」と呼ばれる。姉妹共和国としてフランス総裁政府の統制下に置かれたことは否めないものの、統治を担った人々の中には1770-80年代啓蒙改革の担い手も含まれており、各地域国家で既に提案・推進されていた綱領の役割は大であった。

「共和国／ジャコバンの三年間」におけるキリスト教の役割については、決して十分とは言えないまでも、ある程度の研究の蓄積が存在する(58)。ただし、その大半は啓蒙改革期に大きな役割を果たしたジャンセニスムとジャコビニスム

の結びつきや、彼らに対抗するカトリック側の「反動」に関するものである[59]。プロテスタントに関しては、デーリオ・カンティモーリとレンツォ・デ・フェリーチェによる「ジャコバン的福音主義」研究が重要であろう。カンティモーリは、近世イタリアの改革運動を専門としているものの、1943年には19世紀前半の革命家たちを取り上げ、そこで彼らを近世的な「異端」の後継者と位置づけている[60]。彼の教え子だったレンツォ・デ・フェリーチェは、後にムッソリーニ研究で有名となるものの、経歴の初期には「三年間」を専門としていた[61]。デ・フェリーチェは、「三年間」にのみ活躍した特異な修道院長クラウディオ・デッラ・ヴァッレ（Claudio Della Valle）を取り上げ、彼の理神論的・反教権的なキリスト教構想を「ジャコバン的福音主義」の典型例とみなした[62]。ただし、この用語についてはルチャーノ・グエルチから「福音的ジャコバン主義」と呼ぶべきだという批判がなされた他、近年ではデッラ・ヴァッレを中心とする思想的「派閥」の実在が疑問視されている[63]。

より多くの蓄積があるのは、革命・ナポレオン期のヴァルド派に関する研究である[64]。ヴァルド派は革命の最初期から好意的な態度を示しており、その思想が信教の自由やカトリック教会の打倒に繋がるのではないかと期待を寄せていた。1796年にイタリア方面軍がピエモンテに侵攻し、一時の和約の後に、地元の革命家たちがカルロ・エマヌエーレ４世を廃位してピエモンテ共和国（1798年）が成立すると、ヴァルド派はこれを歓迎し、聖職者総会会議長ピエール・ジェメ（Pierre Geymet, 1737-1816）が臨時政府の一員となった。第二次対仏大同盟の反撃によって同共和国が崩壊すると、ヴァルド派の谷はロシア軍によって占領されたが、将兵は正教徒であるために寛大な処遇を享受した。マレンゴの戦いによって北イタリアの覇権が再びフランスへ移ると、ピエモンテはスバルピーナ共和国となり、次いで1802年にフランス共和国へ併合される。フランスへの併合を推進したアルプスのヴァルド派は、その統治下ではコンコルダート体制に組み込まれ、おそらく史上初めて信教の自由を享受した。

この時期の事件史に関しては、20世紀初頭に活躍したヴァルド派史家ダヴィデ・ヤイエルの論考「革命とフランス共和国・帝国時代のヴァルド派の谷」（1928-32年）の価値が、今日でもなお失われていない[65]。ヤイエルは未刊行史料を博捜して当時のヴァルド派指導者たちの活動を丹念に跡づけており、時系列整理の参照点として不可欠であるのに加え、多くの史料を補遺に収録している点も有益である。とはいえ、既に一世紀以上が経過した現在では、その分析の視点に古さが見られるのは間違いない。

ヤイエルや彼以後の業績を踏まえ、現在の基本書となる論文集が、ヴァルド派史研究協会の年次大会に基づく上述の『聖書・円章・三色旗』（2001年）で

ある[66]。同書は三部構成を採っており、第一部が革命・ナポレオン期イタリア半島、第二部が同時期のヴァルド派議長ジャン・ロドルフ・ペイラン（Jean Rodolph Peyran/Giovanni Rodolfo Peyran, 1751-1823）、第三部が19世紀前半を扱っている。タイトルに反してヴァルド派以外のプロテスタントやヘブライ人を主題とする論考も含み、フランスをはじめとする他のヨーロッパ諸国との比較もしばしば行われているのが特徴である[67]。

本節と関わりのある論考では、まずパオラ・ビアンキの「フランス・ピエモンテ戦争とヴァルド派の谷（1792-99年）」が、スバルピーナ共和国成立以前のヴァルド派の動きを、周辺地域との交渉も踏まえながら詳述している[68]。次いでマルコ・ヴィオラルドの「自由の木からナポレオン体制まで：ヴァルド派名望家の政治的・行政的経験」は、ヴァルド派と馴染みのなさそうな「名望家notabili」概念を用いて共和主義の浸透を論じている点が注目される[69]。エリーザ・ストゥルミア「女性と革命：ヴァルド派地域の特性」は、これまでほとんど論じられてこなかった近代ヴァルド派女性史に着手した画期的な論考であり、実際に「特性」をあぶり出すに至っていない点は惜しまれるものの、研究史上の意義は大きい[70]。ジャン・パオロ・ロマニャーニの「統治者ピエール・ジェメ：牧師から長官まで」は、革命期ヴァルド派の指導者の経験に絞った手堅いモノグラフである[71]。

４．２．復古王政期のヴァルド派

イタリア・プロテスタントに関する研究の中でも、近年多くの成果を挙げてきたのは、イタリア王国成立以前のヴァルド派に関わる領域であるように思われる。前節後半で触れた３論考のうちでも、マゼッリとビアジーニはいずれも復古王政期のヴァルド派を軸としていた。両者以外にも、多くの注目すべき業績が、非ヴァルド派・プロテスタントの歴史家によって生み出されている。

研究の活況の背景にあるのは、統一以前のイタリア諸国に対する評価の見直しである。伝統的なイタリア国民史は、地域国家を外国支配による分断の結果とみなし、その「反動的」性格も合わせて強調することで、リソルジメントによる克服を正当化していた。それに対して、マルコ・メリッジやルーカ・マンノーリ、デイヴィッド・レーヴンの研究は、復古王政諸国が啓蒙改革やフランス革命、ナポレオン支配の遺産を継承し、独自の改革や「国民形成」を進展させていた事実を明らかにしたのである[72]。この再検討の過程において、ビアジーニやマウリツィオ・イザベッラは、復古王政期の立憲主義者たちが単一の「宗教」の共有を社会の基盤とみなしており、個人的な「信教の自由」の許容からは程遠かったことを指摘した[73]。当時の自由主義思想が未だに強い共同体志向の性格を持ち、

社会秩序の根幹として宗教と道徳を位置づけていたとするならば、イタリア半島ないしサルデーニャ王国における最大の宗派的マイノリティであるヴァルド派は、周囲からどのような視線に晒されたのだろうか。この点をめぐっては、2000年代に優れた論考が立て続けに出現した。

19世紀前半のピエモンテにおけるヴァルド派の位置づけを論じたのは、アンドレア・メルロッティの「『ピエモンテにとっての他所者』：19世紀ピエモンテ史学におけるヴァルド派」である(74)。メルロッティは、復古王政期のヴァルド派が政治的・歴史的な二重のスティグマを帯びていたとし、当時の近世史叙述における彼らの表象の同時代性を明らかにしていく。メルロッティによると、王政復古がなされた直後にはフランスに協力的だったヴァルド派が信仰・言語の両面でピエモンテと異質とみなされ、ブリテンと交渉してカトリックのアイルランド住民と交換すべきだという主張までなされる。そのため、近世ヴァルド派のサヴォイア家への抵抗は秩序を乱す騒擾としてネガティヴに論じられるが、1840年代には彼らをピエモンテに包摂しようとする試みや諸外国・国内改革派に配慮した叙述が見られるという。

解放前後に関しては、19世紀イタリア自由主義を代表する新聞『ガゼッタ・デル・ポーポロ』のヴァルド派観を論じたバルトロ・ガリッリョの論考と、カトリック系紙『調和』の反プロテスタント論説を分析したパオロ・コッツォの研究が、相補的な性格を持っている(75)。『ガゼッタ・デル・ポーポロ』紙は、ピウス９世のガエタ逃亡に失望した編集長フェリーチェ・ゴヴェアン（Felice Govean, 1819-98）がネオ・グエルフィズモを捨てて以後、親プロテスタンティズムの性格を強めた。ゴヴェアンは「プロテスタンティズムから自由主義が生まれた」というカトリック非妥協派の図式を受容し、まさにそれゆえに前者を高く評価した。したがって同紙はヴァルド派に対して好意的な報道を続け、後に生まれる自由主義政権とヴァルド派の協調関係の土壌を準備することになった。反対に1848年に創刊された『調和』紙は、当初はヴァルド派に対して両義的な態度――同胞への親愛の念と歴史的な対立意識――を採っていたものの、1850-51年頃にジャコモ・マルゴッティが編集の主導権を握ると、強硬な対立姿勢に転換する。解放直後のピエモンテでは、ヴァルド派による聖堂建設や公的空間の脱カトリック化をめぐる論争が生じており、マルゴッティはカトリックの立場から政府やヴァルド派への批判を展開した。コッツォは、この批判が最も激しく展開された1853-57年の記事を整理している。両者の論考は、時として史料紹介にとどまる面も否めないものの、解放直後のヴァルド派やプロテスタンティズムが「イタリア」や「ピエモンテ」という「ナツィオーネ」の根幹に関わる問題として意識されていたことを示し、有意義である。

時系列が前後したが、1848年の解放令発布の経緯そのものについても、伝統的な条文研究や法制史研究を超えた実証作業が進行している。基本的な情報を整理している古典的研究は、ヤイエルの「1848年以前のカルロ・アルベルトとヴァルド派」（1898年）や「ヴァルド派の谷の復古王政」（1902-03年）である[76]。ここでは復古王政期のヴァルド派が「国民史における最も痛ましい局面」と断じられ、解放へ至る過程が自由の実現として描き出されていた。それに対して近年の研究は、解放令をめぐる国王・自由主義者・諸外国とカトリック教会など多元的なアクターの活動から、その情況性を指摘している。実証レベルでは、ジャン＝パオロ・ロマニャーニの研究（2001年）が基本的な出発点となる[77]。ピネローロ司教アンドレ・シャルヴァとの抗争を国王歓迎祝典に着目して描くダニエーレ・トロンの論考（1998年）は、政治文化史の視点も導入して興味深い[78]。

４．３．宣教とイタリア：帝国史とリソルジメント

キリスト教諸教会による宣教史という領域は、20世紀半ばまでは各教会内部の研究によって独占されていた感があったが、近年にはオリエンタリズム論や植民地統治研究、人種主義研究などとも関連付けられて、近代史研究内部に重要な位置づけを与えられつつある[79]。本稿で論じる19世紀イタリアとプロテスタントという主題の場合には、「宣教」は二重の意味で重要なキーワードとなる。第一にはカトリック圏であったイタリア半島におけるプロテスタントによる「宣教＝福音化Evangelizzazione」であり、第二にはイタリア出身のプロテスタントによるアフリカ・アメリカへの「宣教Missione」や植民である。

既に述べたように、イタリア半島に対するヴァルド派の宣教＝福音化は、19-20世紀ヴァルド派の歴史研究の背景として根源的な意味を有していた。しかし、その宣教の過程に関する実証的な研究は、意外なほど数が少ない[80]。ジェイモナトやコンバといった宣教者のモノグラフ（前節参照）を別とするならば、各地に形成された小さな改宗者共同体の実態は、現在でもほとんど謎に包まれている。ヴァルド派による宣教を書物史の観点から取り上げたガブリエッラ・ソラーリの業績は特筆すべきであるものの、書籍の生産と流通に光が当てられる一方で、読書や消費については手薄である[81]。また、ヴァルド派説教への関心は中世のそれに集中していて、近代の福音化における説教の内容・技法等を扱った研究は不在である。

ヴァルド派以外の福音派による宣教活動についても事例研究が不足しているが、諸外国によるイタリアへの宣教研究は、近年になって重要な成果が発表されている。スピーニの著作を紹介する中で紹介したように、イタリア半島（特に統一国家成立以後）には、多くの福音派宣教師が派遣されていた。このうち、ブリ

テンによる宣教を論じたダニエル・ラポーニの著作が、2014年に出版された[82]。ラポーニは、イタリア半島に対するブリテン人の関心を、帝国主義と文明化の使命そしてプロテスタント諸教会の国際的ネットワークから読み解いており、自由主義期イタリアを幅広い視野において捉え直すことに成功している。また、合衆国からイタリアへの宣教に関しても、メソジストやペンテコステ派といった個別の宗派を単位とした研究が蓄積されており、今後の総合が待たれるところである[83]。

他方で、イタリアからの宣教に関する研究は手薄である。ヴァルド派に関しては南米をはじめとする各地への植民に対する関心が持たれており、現代に至る一種のディアスポラ研究が展開されている[84]。ただし、その多くはアメリカ両大陸を対象としたものである。ヴァルド派による植民地宣教を扱った研究は、レナート・コワッソンによる２月17日叢書の一巻『ヴァルド派と宣教活動』（1963年）やヴァルド派研究センターの図録に限定されており、あくまでヴァルド派教会の視点による記録でしかない[85]。また、ヴァルド派を除く他の福音系諸派による海外宣教や移民に関する研究は、管見の限り不在である。これらの点は、今後の課題として残されている。

５．おわりに：課題と展望

以上のように、本稿では19世紀イタリア・プロテスタント史に関する研究の動向をスピーニの著作とヴァルド派の活動を軸として通時的に概観し、近年に研究が進展した４つのテーマの現状と重要な成果を紹介した。イタリア半島がカトリック圏であるという事実ないし予断もひとつの要因となって、近現代イタリア半島におけるプロテスタントという主題に関する研究は、その重要性に比して周縁的な扱いを受けてきた。20世紀初頭以来、特に自らプロテスタント（特にヴァルド派）である研究者によって優れた業績が蓄積されてきたのは間違いないものの、上述の４テーマについても解明すべき課題は山積しているといってよい。最後に、今後の近代イタリア・プロテスタント研究全体の課題として、筆者の視点から４点を挙げておきたい。

第１点は、近年の研究が統一以前に偏っていること、その結果として自由主義期の活動に関しては、ヴァルド派であれ自由教会派であれ、検証が乏しいことである。これは近代イタリア史研究全体の焦点が18世紀末から19世紀前半へシフトしていることにもよろうが、グイッチャルディーニやガヴァッツィが晩年に入った1870-90年代のプロテスタント諸派にはヴァルド派神学院の教授たちを除くと目立った人物に乏しいことにも由来しよう。この「暗い時代」（スピーニ）に関

しては、20世紀中盤から後半に発表された各知識人のモノグラフ以降、目立った成果が生まれていない[86]。

第二に、その結果として、ヴァルド派が「イタリア」や「ナツィオーネ」といったカテゴリーを受容・運用していく過程に関する研究が不足していることである。ヴァルド・ヴィナイは19世紀後半のヴァルド派が「イタリア化 Italianizzazione」していくと述べるが、その理由は王家への忠誠や宣教熱に帰されており、具体的な過程・様態の検討はなされていない[87]。したがって、ヴァルド派の言説・実践において用いられた「イタリア／ナツィオーネ」概念の構成や性格の詳細は不明のままである。上で紹介したビアジーニの考察は解放令前後に集中しており、ヴァルド派が「イタリアを発見」した統一以後には及んでおらず、今後の大きな検討課題となっている。

第三に、スピーニ以来の遺産として信仰覚醒運動や自由主義のように「近代的」とみなされてきた要素を自らのものとしなかった人々、いわゆる「保守層」に対する検討が欠如していることである。特にヴァルド派について言えば、「イタリア化」や「国民化」が規範視・自明視されることで、その先端にいたジェイモナトやコンバに注目が集まっており、フランス語使用を維持した聖職者や「谷」に残ることを選んだ人々への関心は低調である。また、知識人たちについても近世的な宗派との断絶が強調されるあまり、彼らが過去から受け継いだ知的枠組に関する視点は欠落している。

第四に、近年の研究はイタリア半島の内発性を重んじるあまり、思想的な国際交流の視点を欠いている。確かにスピーニの古典的解釈は海外からの影響に「リソルジメント」の起動力を還元するあまり、それ以前から半島に存在していた潮流や枠組を軽視することになった。とはいえ、彼の主張が一面的な国民史を相対化する意義を有したことも間違いがない。マゼッリのように半島内部・ヴァルド派内部の活力を強調して外部からの介入に過度に否定的な姿勢は、国民国家や宗派を完結した単位とする歴史叙述への回帰をもたらしかねない。また、自由主義期のプロテスタント知識人が国外の宗派との協力関係を模索し、文化闘争やライシテ問題といった海外の政教関係に強い関心を抱いていた事実も忘れるべきではない。ヴァルド派研究に「リソルジメント・ナショナリズム」論の枠組が浸透しつつあることは歓迎すべきであろうが、それがナショナル・ヒストリーによるヴァルド派史の回収に終わってはならない。イタリア半島におけるプロテスタントの歴史は、その固有性や内発性を考慮に入れつつも、単純に「イタリア」や「リソルジメント」と結び付けてはならないのである[88]。

以上を展望として、本稿の結びとしたい

注

(1)　19世紀末の時点で、イタリア王国の総人口約4000万人のうち、プロテスタントと自認するのは11万人足らずに過ぎなかった。現在では、総人口約5500万人のうち、カトリックが約3900万人強、プロテスタントが38万人強とされる。その大部分を20世紀に入って拡大したペンテコステ派（約25万人）が占めており、ルター派・カルヴァン派・ヴァルド派などの「歴史的プロテスタント」は７万１千人に過ぎない。イタリア新宗教研究所による以下の調査を参照。"Dimensioni del pluralismo religioso in Italia | Le Religioni in Italia", ＜https://cesnur.com/dimensioni-del-pluralismo-religioso-in-italia/＞[accessed 29 September 2021].

(2)　イタリア史における時代区分としては、G. Pécout, *Il lungo Risorgimento: la nascita dell'Italia contemporanea (1770-1922)*, Roma, 2011に従う。

(3)　M. Verga, "Decadanza", in A. M. Banti (ed.), *Atlante culturale del Risorgimento: lessico del linguaggio politico dal Settecento all'unità*, Roma, 2011, 5-18.

(4)　この「宗教改革の不在／失敗」テーゼを軸とする最新の史学史整理は、I. Gagliardi, "The Religion of Italians: A Moral and Economical Question? Italian Studies on Protestantism Between the 19th and 20th Century", *Perspektywy Kultury*, 13 (2015), 179-200. より幅広い議論については、C. Mozzarelli, "Eterna o colpevole: tre schede ottocentesche sull'invenzione dell'identità italiana fra classicità e cattolicesimo", in C. Mozzarelli (ed.), *Identità italiana e cattolicesimo: una prospettiva storica*, Roma, 2003, 289-307; S. Biagetti, *Il mito della "Riforma italiana" nella storiografia dal XVI al XIX secolo*, Milano, 2007; G. Cospito, "Il dibattito sulla mancata Riforma protestante nell'Italia del primo Novecento", *Giornale critico della filosofia italiana*, 97: 1 (2018), 130-56.

(5)　ロズミーニに関する先行研究は膨大である。出発点として、P. Marangon, *Il risorgimento della Chiesa: genesi e ricezione delle «Cinque piaghe» di A. Rosmini*, 2000; F. Traniello, *Religione cattolica e stato nazionale: dal Risorgimento al secondo dopoguerra*, Bologna, 2007, 113-124, 140-148を参照。

(6)　19世紀イタリアの史学史一般は、B. Croce, *Storia della storiografia italiana nel secolo decimonono*, Bari, 1921; G. Galasso, *Storia della storiografia italiana: un profilo*, Bari, 2017を参照。

(7)　F. Tocco, *L'Eresia nel medio evo*, Firenze, 1894; E. Comba, *I nostri protestanti*, 2 vols., Firenze, 1895; G. Volpe, *Movimenti religiosi e sette ereticali nella società medievale italiana: secoli XI-XIV*, Re, Roma, 2010. イタリア中世宗教史研究の成立については、白川太郎「イタリア中世宗教史研究の基本的枠組：宗教運動論の成果と課題」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第65輯（2019年）、499-513頁。

(8)　リソルジメントという語彙と概念に関しては、以下の整理が簡便。A. M. Banti, "Risorgimento", in A. M. Banti et als (eds.), *Atlante culturale del Risorgimento: lessico del linguaggio politico dal Settecento all'unità*, Roma, 2011, 33-39.

(9)　この時期の歴史研究と信仰改革論の関係については、G. Giarrizzo, *La storiografia della nuova Italia*, 3 vols., Roma, 2018-2020; R. Pertici, *La cultura storica dell'Italia unita: saggi e interventi critici*, Roma, 2018などを参照。日本語では、倉科岳志『イタリア・ファシズムを生きた思想家たち：クローチェと批判的継承者』（岩波書店、2017年）が有益。

(10)　スピーニについては、マルチェッロ・ヴェルガによる『イタリア伝記事典』の項目が簡便。"SPINI, Giorgio in "Dizionario Biografico"", ＜https://www.treccani.it/

enciclopedia/giorgio-spini_(Dizionario-Biografico)＞［accessed 29 September 2021］.

（11） “COMUNICATO STAMPA N. 03”, *Chiesa evangelica valdese - Unione delle chiese metodiste e valdesi*, 2021 ＜https://www.chiesavaldese.org/aria_articles.php?ref=868＞［accessed 29 September 2021］.

（12） 前者については邦訳がある。ジョルジョ・スピーニ（森田直之・松本典昭訳）『ミケランジェロと政治：メディチに抵抗した《市民＝芸術家》』（刀水書房、2003年）。

（13） G. Spini, *Risorgimento e protestanti*, Napoli, 1956. 以下の記述では、次の最新版を参照する。G. Spini, *Risorgimento e protestanti*, re, Torino, 1989.

（14） Id., *Italia liberale e protestanti*, Torino, 2002; Id., *Italia di Mussolini e protestanti*, Torino, 2006.

（15） 両者の歴史観が現れているのは、B. Croce, *Storia di Europa nel secolo decimonono*, Bari, 1932; F. Chabod, *Storia della politica estera italiana dal 1870 al 1896*, Bari, 1951. ただし、クローチェはイタリアにおいてプロテスタンティズムが浸透する可能性については懐疑的で、カトリックの代替物として哲学を想定していたようである。B. Croce, *Storia d'Italia dal 1871 al 1951*, Bari, 1928.

（16） Spini, *Risorgimento e protestanti*, 64.

（17） プロテスタンティズムは、ムッソリーニに対する抵抗の精神的基盤であるとみなされる。Spini, *Italia di Mussolini e protestanti*, 6-7.

（18） Spini, *Risorgimento e protestanti*, 13.

（19） Ibid., 31.

（20） Ibid., 11.

（21） Ibid., 64.

（22） J. C. L. S. de Sismondi, *Histoire des républiques italiennes du Moyen Âge*, Nouv. éd, 16 vols., Paris, 1826. シスモンディのインパクトについては、D. Balestracci, *Medioevo e Risorgimento: l'invenzione dell'identità italiana nell'Ottocento*, Bologna, 2015が有益。

（23） Spini, *Risorgimento e protestanti*, 76.

（24） W. R. Ward, *Early Evangelicalism: A Global Intellectual History, 1670-1789*, Cambridge, 2006; D. Bebbington, “The growth of voluntary religion”, in S. Gilley and B. Stanley (eds.), *The Cambridge History of Christianity*, Cambridge, 2014, 53-69.

（25） Spini, *Risorgimento e protestanti*, 143-152.

（26） ブリテンによるヴァルド派保護については、西川杉子『ヴァルド派の谷へ：近代ヨーロッパを生きぬいた異端者たち』（山川出版社、2003年）を参照。

（27） 19世紀前半のイタリア半島からの亡命者については、M. Isabella, *Risorgimento in Exile: Italian Émigrés and the Liberal International in the Post-Napoleonic Era*, Oxford, 2009を参照。

（28） Spini, *Risorgimento e protestanti*, 115-125.

（29） Ibid., 116.

（30） Ibid., 124-125, 250-257.

（31） Spini, *L'Italia liberale e protestanti*, 105-136.

（32） Ibid., 128-136. コンバについては白川太郎「『福音的イタリア』とリソルジメント：自由主義期のヴァルド派牧師エミーリオ・コンバとその歴史叙述」『史観』第184号（2021年）、72-98頁も参照。

（33） 「リソルジメント」に関する研究史は、L. Riall, *Risorgimento: The History of Italy from*

Napoleon to Nation-State, Basingstoke, 2009を参照。

(34) G. Spini, *L'evangelo e il berretto frigio: storia della chiesa cristiana libera in Italia: 1870-1904*, Torino, 1971.

(35) D. Maselli, *Tra risveglio e millennio: storia delle chiese cristiane dei fratelli: 1836-1886*, Torino, 1974; Id., *Libertà Della Parola: Storia Delle Chiese Cristiane Dei Fratelli, 1886-1946*, Torino, 1978.

(36) "Guicciardini", *Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze*, ＜https://www.bncf.firenze.sbn.it/risorse/guicciardini/＞[accessed 29 September 2021].

(37) "Associazione Piero Guicciardini", *associazioneguicciardinis JimdoPage!*, ＜http://associazioneguicciardini.jimdofree.com/＞[accessed 29 September 2021].

(38) 重要な研究論集として、L. Giorgi and M. Rubboli (eds.), *Piero Guicciardini 1808-1886: un riformatore religioso nell'Europa dell'Ottocento*, Firenze, 1988; G. Spini, S. Carile, and F. Chiarini (eds.), *Il metodismo italiano*, Torino, 1997; S. Gagliano (ed.), *Il protestantesimo italiano nel mezzogiorno tra otto e novecento*, Milano, 2013; S. Gagliano (ed.), *Settecento religioso, Settecento riformatore*, Milano, 2016など。

(39) 神学院についてはV. Vinay, *Facoltà Valdese di teologia 1855-1955*, Torre Pelice, 1955、出版社についてはC. Papini and S. Tourn, *Claudiana, 1855-2005: catalogo storico*, Torino, 2005を参照。近世の歴史叙述については、G. Gonnet, "Remarques sur l'historiographie vaudoise des XVI e et XVII e siècles", *Bulletin de la Société de l'histoire du protestantisme français*, 120 (1974), 323-65; 有田豊「独自の起源伝承にみる宗教改革期のヴァルド派の集団意識について」『関西フランス語フランス文学』第18巻（2012年）、3-13頁；同「近代ヴァルド派史書にみる起源伝承の変遷とその変化理由」『リュテス』第41巻（2013年）、21-36頁。

(40) 研究協会については、D. Tron, "Centoventi anni di cultura valdese: l'attività della Società di studi valdesi tra ricerca storica e divulgazione", in *Le ragioni del futuro: Le Società di studi storici in Piemonte*, Pinerolo, 2004, 65-71; G. Ballesio, "Un progetto collettivo: gli storici della Società di studi valdesi", in G. Fassino and F. Zampicinini (eds.), *La memoria dei luoghi: gli storici locali in Piemonte tra Ottocento e Novecento*, Torino, 2020, 143-153.

(41) E. Comba, *Storia della Riforma in Italia narrato col sussidio di nouvi documenti*, Firenze, 1881; Id., "A proposito del movimento anticlericale in cui si dimostra come l'amore alle nostre libertà ci costringe a considerare la necessità di una riforma religiosa", *La Rivista cristiana*, 14 (1886), 243-58.

(42) S. Maghenzani and G. Platone (eds.), *Riforma, Risorgimento e risveglio: il protestantesimo italiano tra radici storiche e questioni contemporanee*, Torino, 2011.

(43) G. P. Romagnani (ed.), *La Bibbia, la coccarda e il tricolore: i valdesi fra due emancipazioni, 1798-1848*, Torino, 2001.

(44) B. Bellion (ed.), *Dalle valli all'Italia: i Valdesi nel Risorgimento (1848-1998)*, Torino, 1998.

(45) E. Ricciarelli, "La "Rivista Cristiana"", *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 113 (1996), 74-87.

(46) B. Peyrot, "I Valdesi e l'evangelizzazione in Italia: quarant'anni di studi (1945-1985)", *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 164 (1989), 63-92.

(47) 一例として、V. Vinay, "La prima e la seconda Riforma nel passato e nel presente della Chiesa Valdese", *Protestantesimo: Rivista trimestrale pubblicata dalla Facoltà valdese di*

teologia, 22: 3-41（1967）, 129-47; Id., "Il piccolo Catechismo di Lutero come strumento di evangelizzazione fra gli italiani dal XVI al XX secolo", *ibid.*, 25: 2（1970）, 65-84.

（48） 彼の研究の集大成は、1970年代から1980年に刊行された『ヴァルド派史 *Storia dei valdesi*』全３巻の最終巻『近代』である。A. Molnar, A. Armand Hugon, and V. Vinay, *Storia dei valdesi*, 3 vols., Torino, 1974-80; V. Vinay, *Storia dei valdesi,* Vol. 3: Dal movimento evangelico Italiano al movimento ecumenico（1848-1978）, Torino, 1980. 同書では19世紀イタリア半島におけるプロテスタント諸派の動向が幅広く論じられているため、ヴァルド派の歴史ではないという批判もあったようだが、スピーニよりも中立的かつ読みやすい整理として価値は高い。なお、同シリーズは、中世をモルナール、近世をオーギュスト・ウゴン、近代をヴィナイが執筆している。通史としては今日でも参照されるものの、歴史像や実証精度、扱うテーマ等において古びてきている点は否めないため、ヴァルド派研究協会では2024年を期して新たな通史の執筆を進めている。

（49） V. Vinay, *Luigi Desanctis e il movimento evangelico fra gli italiani durante il Risorgimento.*, Torino, 1965; T. Van Den End, *Paolo Geymonat e il movimento evangelico in Italia nella seconda metà del secolo XIX*, Torino, 1969; C. Milaneschi, *Ugo Janni pioniere dell'ecumenismo*, Torino, 1979; S. Biagetti, *Emilio Comba（1839-1904）: storico della Riforma italiana e del movimento valdese medievale*, Torino, 1989.

（50） Vinay, *Facoltà Valdese di teologia 1855-1955*; Id., *Evangelici italiani esuli a Londra durante il Risorgimento*, Torino, 1961.

（51） G. Tourn, *Risorgimento e chiese cristiane*, Torino, 2011.

（52） S. Maghenzani（ed.）, *Il protestantesimo italiano nel Risorgimento: influenze, miti, identità*, Torino, 2012. 研究集会の参加記として、F. Tasca, "Il Protestantesimo Italiano nel Risorgimento", *Rivista di storia della Chiesa in Italia*, 66: 1（2012）, 197-207.「リソルジメント」を16世紀の継続ではなく19世紀的現象として再考すべきというロマニャーニの講演（論集には未収録）が物議を醸した、という報告が興味深い。

（53） G. Tourn, *Risorgimento e chiese cristiane*、cit. は、プロテスタントが「イタリア化」する困難をより強調するものの、枠組はスピーニから受け継いでいる。

（54） D. Maselli, "I valdesi tra Restaurazione e Risorgimento", in Maghenzani, *Il protestantesimo italiano nel Risorgimento: influenze, miti, identità*, cit., Torino, 2012, 47-65; E. F. Biagini, "La nazione sinodale: patria e libertà nella retorica protestante italiana, 1848-1866", *ivi.*, 89-111.

（55） S. Maghenzani, "Storiografia protestante e Riforma italiana del Cinquecento nell'età del Risorgimento", *ivi.*, 127-44.

（56） Biagini, "La nazione sinodale", 89-90. リソルジメント・ナショナリズム論の主唱者アルベルト・マーリオ・バンティの主著は、A. M. Banti, *La nazione del Risorgimento: parentela, santità e onore alle origini dell'Italia unita*, Torino, 2000; Id., *Sublime madre nostra: la nazione italiana dal Risorgimento al fascismo*, Roma, 2011. なお、「新しいリソルジメント史」の呼称も用いられる。

（57） 文化史偏重への批判のきっかけとなったのは、G. Albergoni, "Sulla nuova storia del Risorgimento: note per una discussione", *Società e storia*, 120（2008）, 349-66; L. Mannori, "Il Risorgimento tra "nuova" e "vecchia" stroria: note in margine ad un libro recente", *ibid.*, 367-79の書評。その後の研究としては、A. De Benedictis, I. Polverini Fosi, and L. Mannori（eds.）, *Nazioni d'Italia: identità politiche e appartenenze regionali fra Settecento e Ottocento*,

Roma, 2012; G. Cazzetta（ed.）, *Retoriche dei giuristi e costituzione dell'identità nazionale*, Bologna, 2013; L. Mannori, *Costituire l'Italia: il dibattito sulla forma politica nell'Ottocento preunitario*, Pisa, 2019.

（58） 研究動向の整理として、S. Giombi, "La Rivoluzione Francese e Il Cattolicesimo in Italia", *Rivista di storia e letteratura religiosa*, 27: 3（1991）, 497-517; C. Tosi, "Repubblica e religione: Studi recenti sul rapporto tra politica e religione nella prima Repubblica Cisalpina（1796-1799）", *Rivista di storia e letteratura religiosa*, 31: 2（1995）, 293-319; V. Criscuolo, "Il problema religioso nel triennio 1796-1799: risultati e prospettive", in Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*, cit., 11-31.

（59） 主要なものは以下のとおり。V. E. Giuntella, "Il cattolicesimo democratico nel triennio giacobino", in M. Rosa（ed.）, *Cattolicesimo e Lumi nel Settecento italiano*, Roma, 1981, 268-94; V. Criscuolo, "Riforma religiosa e riforma politica in Giovanni Antonio Ranza", *Studi Storici*, 30: 4（1989）, 825-72; D. Menozzi, "Tra riforma e restaurazione. Dalla crisi della società cristiana al mito della cristianità medievale（1758-1848）", in G. Chittolini and G. Miccoli（eds.）, *La Chiesa e il potere politico dal medioevo all'età contemporanea*, Torino, 1989, 769-806; M. Rosa, "Di fronte alla rivoluzione: politica e religione in Italia dal 1789 al 1796", *Rivista di storia e letteratura religiosa*, 26: 3（1990）, 508-40; M. Caffiero, *La nuova era: miti e profezie dell'Italia in rivoluzione*, Genova, 1991; P. Corsini and D. Montanari（eds.）, *Pietro Tamburini e il giansenismo lombardo*, Brescia, 1993; L. Guerci, "*Mente, cuore, coraggio, virtù repubblicane": educare il popolo nell'Italia in rivoluzione（1796-1799）*, Torino, 1992; V. E. Giuntella, *La religione amica della democrazia i cattolici democratici del Triennio rivoluzionario, 1796-1799*, Roma, 1995; L. Guerci, "Incredulita e rigenerazione nella Lombardia del triennio repubblicano", *Rivista storica italiana*, 109（1997）, 49-120; A. M. Rao, M. Formica, and P. Delpiano（eds.）, *Il Settecento e la religione*, Roma, 2019.

（60） D. Cantimori, *Utopisti e riformatori italiani, 1794-1847*, Firenze, 1943. 最新の復刊は、アドリアーノ・プロスペリの序文がついたId., *Utopisti e riformatori italiani*, rep., Roma, 2021.

（61） R. De Felice, *Il triennio giacobino in Italia（1796-1799）: note e ricerche*, Roma, 1990.

（62） Id., "L'evangelismo giacobino e l'abate Claudio Della Valle", *Rivista storica italiana*, 69（1957）, 196-249, 378-410. その後Id., *Italia giacobina*, Napoli, 1965に再録。

（63） Guerci, *Mente, cuore, coraggio, virtù repubblicane*; Tosi, "Repubblica e religione nella prima repubblica cisalpina（1796-1799）".

（64） 18世紀のヴァルド派については、G. P. Romagnani, *«Religionari». Protestanti e valdesi nel Piemonte del Settecento*, Torino, 2021; A. Armand Hugon, "L'Illuminismo fra i valdesi", *Studi di letteratura storia e filosofia in onore di Bruno Revel*, Firenze, 1965, 13-29; F. Venturi, "Un pastore valdese illuminista: Jacques Brez", *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 87: 120（1966）, 63-74を参照。

（65） D. Jahier, "Le Valli valdesi durante la Rivoluzione, la Repubblica e l'Impero francese（1789-1814）", *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 52; 54; 60; 61; 62; 64; 65; 66（1928-32）, 5-58; 39-78; 68-97; 5-34; 41-81; 48-81; 11-37; 5-20.

（66） Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*.

（67） より広範な比較として、同論集と寄稿者も重なっている、R. Liedtke and S. Wendehorst（eds.）, *The Emancipation of Catholics, Jews, and Protestants: Minorities and the*

Nation State in Nineteenth-Century Europe, Manchester, 1999がある。

(68) P. Bianchi, "La guerra franco-piemontese e le Valli valdesi (1792-1799)", in Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*, cit., 71-117.

(69) M. Violardo, "Dall' albero della libertà alle istituzioni napoleoniche: esperienze politiche ed amministrative dei notabili valdesi", in *Ibid.*, 127-42.

(70) ヴァルド派と女性（あるいはヴァルド派の女性）という問題設定は、これまで中世ヴァルド派に限定されてきた。こちらに関しては既に多くの蓄積がある。M. Benedetti, *Donne valdesi nel Medioevo*, Torino, 2007を概説として参照。近代に関しては、G. Bonansea and B. Peyrot, *Vite discrete: corpi e immagini di donne valdesi*, Torino, 1993.

(71) G. P. Romagnani, "Pierre Geymet uomo di governo da pastore a funzionario", in Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*, cit., 181-210.

(72) D. Laven and L. Riall (eds.), *Napoleon's Legacy: Problems of Government in Restoration Europe*, Oxford, 2000; D. Laven, *Venice and Venetia under the Habsburgs, 1815-1835*, Oxford, 2002; M. Meriggi, *Gli stati italiani prima dell' unità: una storia istituzionale*, 2nd ed., Bologna, 2012; De Benedictis, Polverini Fosi and Mannori, *Nazioni d'Italia*, cit.

(73) E. F. Biagini, "Citizenship and religion in the Italian constitutions, 1796-1849", *History of European Ideas*, 37: 2 (2011), 211-7; M. Isabella, "Citizens or Faithful? Religion and the Liberal Revolutions of the 1820s in Southern Europe", *Modern Intellectual History*, 12: 3 (2015), 555-78.

(74) A. Merlotti, "«Stranieri al Piemonte»: i valdesi nella storiografia piemontese dell'Ottocento", in Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*, cit., 455-92.

(75) B. Gariglio, "Felice Govean, la «Gazzetta del popolo» e i valdesi", in *Ibid.*, 411-23; P. Cozzo, "Protestantesimo e stampa cattolica nel Risorgimento. L'«Armonia» e la polemica antiprotestante nel decennio preunitario", *Rivista di storia e letteratura religiosa*, 36: 1 (2000), 77-113; Id., "La polemica antiprotestante dell'«Armonia»", in Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*, cit., 425-39.

(76) D. Jahier, "Charles Albert et les Vaudois avant 1848", *Bollettino della Società di Studi Valdesi*, 15 (1898), 1-32; Id., "La Restaurazione nelle Valli Valdesi", *ivi.*, 30; 33; 34; 35; 36, 37 (1912-16), 21-60; 5-64; 5-41; 5-76; 9-67; 9-55.

(77) G. P. Romagnani, "Carlo Alberto e i valdesi", in Romagnani, *La Bibbia, la coccarda e il tricolore*, cit., 285-303.

(78) D. Tron, "Fra discriminazione e libertà civili. I valdesi nel Piemonte sabaudo prima del 1848", in Bellion, *Dalle valli all'Italia*, cit., 9-46.

(79) 一例として、A. Porter, ""Cultural imperialism" and protestant missionary enterprise, 1780-1914", *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, 25: 3 (1997), 367-91; R. Dunch, "Beyond Cultural Imperialism: Cultural Theory, Christian Missions, and Global Modernity", *History and Theory*, 41: 3 (2002), 301-25; S. J. Brown (ed.), *Providence and Empire: Religion, Politics and Society in the United Kingdon, 1815-1914*, Harlow, 2008; D. L. Robert (ed.), *Converting Colonialism: Visions and Realities in Mission History, 1706-1914*, Grand Rapids, 2008; M. Gladwin, "Mission and Colonialism", in J. D. S. Rasmussen, J. Wolfe, and J. Zachhuber (eds.), *The Oxford Handbook of Nineteenth-Century Christian thought*, Oxford, 2017, 282-307など。日本語では、杉本良男編『福音と文明化の人類学的研究』（国立民族学博物館、2002年）；稲垣春樹「帝国と宣教：19世紀イギリス帝国史にお

ける宗教の復権」『史学雑誌』第121巻６号（2012年）、1111-1134頁。

（80） Peyrot, "I Valdesi e l'evangelizzazione in Italia: quarant'anni di studi（1945-1985）".

（81） G. Solari, *Produzione e circolazione del libro evangelico nell'Italia del secondo ottocento: la casa aditrice Claudiana e i circuiti popolari della stampa religiosa*, Manziana, 1997.

（82） D. Raponi, *Religion and Politics in the Risorgimento: Britain and the New Italy, 1861-1875*, Basingstoke, 2014.

（83） A. Annese, "Il metodismo in Italia dall'Unità al "caso Buonaiuti": Profilo storico-religioso", Roma, 2017; G. Traettino, *Il movimento pentecostale in Italia（1908-1959）*, Trapani, 2019.

（84） G. Ballesio（ed.）, *I valdesi nel Rio de la Plata:（1858-2008）; modelli di emigrazione*, Torino, 2009; L. Pilone, "*Radici piantate tra due continenti": l'emigrazione valdese negli Stati Uniti d'America*, Torino, 2016.

（85） R. Coisson, *I Valdesi e l'opera missionaria*, Torre Pellice, 1963; D. Rosso（ed.）, *Giacomo Weitzecker e Luigi Jalla: missionari e geografi valdesi in Africa australe a fine Ottocento*, Torre Pellice, 2019.

（86） Spini, *L'Italia liberale e protestanti*, 85-86.

（87） Vinay, *Storia dei valdesi,* Vol. 3, 154.

（88） 近年の19世紀イタリア史研究では、こうした傾向とは逆に移民・亡命者といった主題が大きな注目を集めており、両者の対話が待たれる。Isabella, *Risorgimento in Exile*, cit.; 北村暁生「流出する民を統治できるのか：移民法の制定をめぐる議会と国民国家」、北村暁夫・小谷眞男編著『イタリア国民国家の形成：自由主義期の国家と社会』（日本経済評論社、2010年）、129-149頁; M. Isabella and K. Zanou（eds.）, *Mediterranean Diasporas: Politics and Ideas in the Long 19th Century*, London, 2016; 林孝洋「ニューヨークの「イタリア統一運動」：ガリバルディ支援をめぐるイタリア系亡命者の実践とその連鎖」『史林』第102巻５号（2019年）、35-68頁などを参照。

A Very Short Introduction to the Historical Studies on Modern Italian Protestants

SHIRAKAWA Taro

This article aims at reviewing the main research trends on the History of Protestants in modern Italy and at presenting the current issues and future prospects. The period covered here roughly coincides with the "Long Nineteenth Century," from the revolutionary movements of the 1790s to the First World War. Geographically, the article will focus on the Italian peninsula and its surrounding islands, but it also covers areas not included in the current State of Italy, as well as the activities of exiles and emigrants. The first chapter discusses the topos of "mancata riforma" (absence and fail of the Reformation) widely diffused in the 19th and early 20th centuries and examined its impact on Italy's national historiographies. Chapter 2 analyses the works of the historian Giorgio Spini, who established not only the historiographical but also institutional basis for the study of modern Italian protestants. Spini, as a crocean liberalist and Methodist lay preacher, identified the Risorgimento with the development of ethical liberty both in individuals and in the nation and placed strong emphasis on the external influence from protestant countries on the peninsula. In Chapter 3, the focus turns to the historiography of the Alpine Waldensian, which has developed its own historical school and points out that from the second decade of the 21st century the new theory of "Risorgimento Nationalism" has transformed their interpretation of the history of Modern Italian protestants. Chapter 4 presents the basic literature and research trends on three of the major historiographical themes of the subject: "Triennio giacobino/ repubblicano" (Three years of Jacobinism/ Republics), the Waldensians during the Restoration, and studies on the internal mission and the emigration. In the final section, I will suggest the four remaining tasks to be explored by further research: the activities of Protestant intellectuals in the liberal era (1861-1922), the process of the penetration and operation of the modern categories (such as "Nazione," "Italia") into Waldensian discourses and practices, the research of the "conservative" majority of Waldensians, and the breakthrough of national history through the recovery of an international perspective.